

②論文要旨（博士後期課程）

論 文 要 旨	
申請者氏名	長 井 弘 之
申請学位	博 士（言語教育学）
主論文題目	
日本語教育におけるアクセント指導に関する横断的研究 －国語教育学・方言学の視点を取り入れて－	
主論文要旨（邦文は4,000字以内、外国語は2,000語以内）	
<p>本研究は、日本語のプロソディの中で、特に習得が難しいとされるアクセントに焦点を当てて論述を展開する。</p> <p>日本語は、「高低アクセント」により語彙を弁別・統合するという重要な機能を有している。にもかかわらず日本語教育の現場では軽視され指導に時間を費やしていないのが現状である。その原因は、日本語検定・能力試験に発話試験がないなど、多くの理由が互いに影響しあっているためであった。</p> <p>本研究ではこれらの原因の一つ一つを明らかにしながら、従来の日本語教育の研究ではおこなわれていなかった、「日本語教育」「国語教育」「方言学」を横断的に研究し、日本語共通語アクセント（東京式アクセント）の効果的な指導法を提案し、非日本語母語話者である日本語学習者と日本語母語話者（特に方言話者）の双方に有効な指導法を提案するものである。各章の概要は次のとおりである。</p> <p>第1章では、本研究の目的である次の三点をあげた。第一に、日本語の特徴であるアクセント指導をおこなわない原因を究明すること。第二に、VT法との整合性の証明をおこなうこと。第三に、従来のVT法による指導の困難を補うためのアクセント指導法の研究である。</p> <p>次章以降、上記の研究目的のために、各章でおこなった調査、考察、検討事項等を述べる。</p> <p>第2章では、言語とは何をもって区別されるのかを考察した。とくに、方言と英語・フランス語といった広域で話されている言語の差異、日本語では共通語と方言の差異について先行研究をまじえて考察した。言語学の定義によって、方言を母語、共通語を第二言語と定義できることに言及した。</p> <p>また、英語教育と日本語教育を比較し、規範性について言及し、双方に規範性が有することを明らかにした。さらに、日本語における規範性は、東京方言をベースとした共通語であり、日本語教育における目標言語は共通語であることを述べた。</p> <p>第3章では、日本人方言話者が日本語の共通語アクセントの指導を受けなければ、どのような発話のアクセントの実態になるのかを探るべく、無アクセント方言話者の調査を通じて考察した。</p> <p>日本語母語話者である無アクセント方言話者は、自らは共通語を発話していると認識していても、実際には方言干渉された共通語を発話しているということを実証した。さらに、自己の言語認識に対して、発話アクセントが異なる「ずれ」のメカニズムをVTSによって実証した。</p> <p>第4章では、第3章と同様に、日本語学習者が日本語の共通語アクセントの指導を受けな</p>	

ければ、どのような発話のアクセントの実態になるのかを探るべく、調査を通じて考察した。

日本語共通語アクセントの指導は、おこなわなければ向上しないことを、日本語学習者を対象とした調査結果から分析し実証した。また、アクセントの認識がなければ、日本語の語彙をアクセントに頼らずに、語彙の音韻の組み合わせで弁別していることも明らかにした。

さらに、発話時のアクセントと聴取時のアクセントの生成過程に違いがあることを指摘した。

第 5 章では、日本人方言話者のうち無アクセント方言話者と日本語学習者が、日本語アクセントに対する知覚や知識を持ち合わせていないという共通点から、両者の類似性について言及した。さらに両者の類似性を言及することにより、共通のアクセント指導法が可能であることを探った。

日本語学習者と無アクセント方言話者は、アクセントにより語彙を弁別しないという類似点を指摘し、数値により類似性を実証した。さらに、両者の類似性から共通のアクセント指導法が可能であることを言及した。

第 6 章では、アクセントを無視した発話をする日本語学習者の原因は、人的要因によるのではないのかという予測のもと、日本語教師の発話実態を調査し、考察・検討をおこなった。

日本語学習者の発話の音声的誤りは、母語干渉または母語の方言干渉が原因であるという従来の先行研究から、日本語教師にも原因があるということを提起し、第 4 章であげている日本語学習者が正しくないアクセントで発話する理由が、日本語教師が正しくないアクセントを提示することにも原因しているということを、VT 法でいう「正しい発話の聴取によって正しい発話を表出する」を逆説的に証明した。

第 7 章では、日本語学習者の日本語教育モデルと、日本人の国語教育、双方におけるアクセント教育に関し、アクセントをはじめ音声教育がおこなわれない理由を考察し検討した。

アクセント指導がおこなわれない理由として、共通語を避け学習意欲を希薄化させる社会的要因、方言と共通語の積極的指導の欠如という教育的要因、という二つの要因を指摘した。さらに、知識・認識不足の教師、試験制度からの発話試験の排除、教科書・国語辞書の省略が行われる、という三つの影響が生じ、現在のアクセント指導を含めた音声指導を軽視・未実施に至った原因について言及した。

第 8 章では、現在の日本語のアクセント表記方法が多いことを鑑み、先行研究をまじえ、現在の日本語アクセントの表記方法について検討し、より良い表記法を考察した。

考察結果から、日本語アクセントの表記方法のうち、尾高型アクセント型が日本語学習者にとって誤解を生じさせることから、新しい尾高型アクセント型の表記法について提案した。

第 9 章では、第 5 章の無アクセント方言話者と日本語学習者の類似性から、同じアクセント指導法が用いられるかの可否を問う意味で、また先行研究の記述の補強のため、二つの日本語学習者のグループに日本語の授業内で、日本語学習者に共通語アクセントの事前指導をおこないながら指導をおこなった。

さらに、日本語プロソディの指導において、イントネーションがアクセントに優先すべきであることを数値で実証した。さらに、VTS で述べる「全体構造」の理論である、全体であるイントネーションの指導から開始し、その下位であるアクセント指導をおこなうという理論と合致していることを証明した。すなわち、リズム→イントネーション→アクセント→個別音というハイラルキーが考えられ、各要素が個別ではなく全体構造的に関係し合っていることを証明した。

第 10 章では、VTS の歴史的経過を踏まえた理論を概説し、本研究で述べた VTS との整合性に言及した。また、VTS の重要理論である「緊張と弛緩」によるアクセント指導の基本を述べた。

従来の VT 法による身体リズム運動指導法技術の習得に多くの知識・技術・経験・時間が必要である点を指摘し、あらたな身体リズム運動指導法を用いたアクセント指導を提案した。

第 11 章では、本研究のまとめとして、本研究を概観し、本研究の成果、および本研究の独自性に言及した。

さらに、第 1 章で挙げた本研究の目的の検証をおこない、日本語教育を含む日本語には、アクセント指導を含め音声指導が必要な理由を述べるとともに、今後の改善策を提起した。また、本研究各章で調査・研究した事項について VTS との整合性について述べた。

本研究の独自性は、次のとおりである。

1. 日本語アクセントが軽視され指導をおこなわれない原因について解明した。

2. 日本語アクセントに関して、日本語教育、国語教育、方言学、の三領域を横断的に調査・研究した。
3. 従来は踏み込まれず研究がなされていなかった、日本語教師の発話実態について言及した。
4. アクセント指導の順序、日本語アクセントとは異なる発話のアクセントに関する事象について、VTS 理論によって証明した。
5. 従来の VT 法における指導方法では、技術の習得に多くの知識・技術・経験・時間が必要である点を補う指導案を提案した。

研究成果は次のとおりである。

1. アクセント指導をおこなわない原因として、次の要因を明らかにした。  
第一点は、過去の標準語教育に端を発した中央言語に対する嫌悪感や方言蔑視から、共通語を避け、共通語の学習意欲を希薄化させている。  
第二点は、文部科学省の学習指導要領に明記されている方言と共通語の指導が、実際の教育現場では積極的な教育がなされず効果が生じていない。  
上記の二つの要因を明らかにし、次の原因に至った。
  - (1) 日本語関係の検定試験からの発話試験を除外するという試験制度の不備
  - (2) 教科書や国語辞書に対するアクセントの表記や説明の省略
  - (3) アクセントの理解不足によりアクセント指導ができない・方法がわからないという指導者生み出すという教育技術の不備さらに、上記の原因は、互いにさらに影響しあい、悪循環を繰り返しながら、最終的にアクセント指導を軽視し、おこなわないという現在の状態に至ったと結論付けた。
2. 日本人の無アクセント方言話者と日本語学習者の類似性を数値により証明した。山田(2007)の主張を補強し、後述する 4.の指導法が両者に有効であるという結論に結び付けた。
3. 本研究で調査・考察した内容について、VTS 理論を以下のとおり実証・補強した。
  - (1) 第 3 章では、自己の言語認識と発話実態のずれについて、VTS 理論である、「母語のフィルター」という概念によって立証した。
  - (2) 第 4・6 章では、VTS 理論でいう「正しい発話の聴取が正しい発話に結びつく」という理論によって立証した。
  - (3) 第 7 章では、「全体」である「イントネーション」から学習を始め、「下位」である「アクセント」を学習するという順序は、VTS 理論の「全体構造」と合致することを立証した。
4. VT 法の指導技術を習得するには知識・技術・経験・時間が必要であり、さらに多くの「動作」を要するという困難さを指摘した。さらに、困難さを補うべく VTS 理論に基づく、語彙の意味と関連付ける新たな身体リズム運動を提案した。

上記の研究結果から、日本語教育・国語教育双方において、アクセント指導はおこなうべきであるという結論を導き出した。

今後、アクセント指導を行うために、以下の改善策を提起した。

1. 学習指導要領にもとづく、アクセントを含む共通語の発話指導を徹底し、発話指導を体系的におこなえる指導者の育成を行なう。
2. 日本語検定試験制度の会話試験を導入する。
3. 前 1.を達成するための指導者育成の指導法、および学習者への指導法を確立する。